

◆八木健 選 ～句集『岬(とき)の跡(あと)』に学んだこと②～

角川文化振興財団の月刊誌『俳句』四月号の「新刊サロン」の欄で、梶原美邦先生の句集『岬の跡』の書評を書かせていただいた。面白い句が多くて、句集の句からインスピレーションをいただき、オマージュの句が次々とできた。書評では一句でも多く、句集の句を紹介できると思い、原句とオマージュの句を並べた原稿を執筆していた。ところが、編集者から、句集についてより分かりやすい原稿にして欲しいとの依頼があり、先月号のような内容となった。

今回は、その最初に執筆していた原稿をご紹介します。

三月の思惑の急く工事音

汗男のそり這ひ出るマンホール

覚めぎはの記憶白紙の春炬燵

未完の句ならべて更ける春炬燵

落ちてなほ時間の鼓動べにつばき

落ちしまま動きのとれぬ紅椿

小川覗きに来る足音へ蝌蚪の陣

悪童の声に慌てる蝌蚪の国

前灯が電車となれる梅雨の駅

黄ばみつつ路面電車の春灯は

兜虫の威厳が子らに感染す

兜虫擬人化させて児が威張る

みせかけの同情むせる心太

顔いてするする啜る心太

数冊の暑さが重くなる鞆

持ち重りする坂道のお大根

川音の機嫌に暮らす里の秋

せせらぎの饒舌春のBGM
秋風のギターがひとり歌ひだす
秋の夜を泣いてもみせてバイオリン
赤鉛筆が丸くれたがる休暇明け
算数は親も苦手で八月尽
一枚の秋思たたんでゐる手紙
追伸の追伸きりもなき秋思
柱時計のしづかさの鳴る去年今年
去年今年跨いで柱時計鳴る
電柱が影もて余す深雪晴
電柱の片蔭瘦せて真直ぐなる
自転車の倒れつぷりの春一番
低姿勢春一番へペダル踏む
指を切る紙が余寒の刃となれり
白紙が疑はれゐる鎌鼬
歓声のひつくりかへつて風光る
バックテンものの見事に運動会
空缶のちやらんぼらんと川四月
春一番待て待て待てと空缶は
囀りをちらちら落としゐる大樹
囀りと糞が大樹の落とし物
街騒の遠近とらへゐる網戸
街騒を拒む網戸の穴だらけ
留守番の日の風鈴がむきになる
手抜きして寂しいときの風鈴は
日焼けせし夢の崩るる砂の城
砂上の楼閣炎天に堪へ立つ

落蟬の死がざわざわと掃かれをり

仰向けに転がる蟬のもがく脚

枝豆のつるつと本音出たしまふ

はづれなり莢に豆なき枝豆は

昼寝覚め昨日が今日になりたがる

ひとところ記憶欠けたる昼寝覚

団扇以て内緒話を風とせり

秋団扇夏の記憶をたぐり寄す

人混みのさびしさ貰ふ花火果て

花火果て帰りのバスの時間言ふ

沈黙が二人の安堵夜長の灯

論客の居て結論の出ぬ夜長

退屈がごろんと眠る大南瓜

へぼ胡瓜歪んだ味のしてみたる

熟柿吸ふ口が幼くなつてゆく

熟柿吸ふはじめのうちは上品に

てつぺんの空に飽きたる烏瓜

句に詠めど手には届かず烏瓜

未来への抜け道できし大枯野

来た道に戻るほかなし大枯野

◆梶原美邦（かじわらよしくに）

昭和十九年、山梨県生まれ。国語の教員として働き始めた頃、同僚に誘われて俳句を始める。二十八歳の時に「青芝」に入会し、八幡城太郎に師事する。平成二十三年、青芝の三代目主宰となる。俳人協会会員、日本現代詩歌文学館会員。

俳句の信条は、「俳句は対象の真実を印象として表現する詩である」とし、

今回の句集名には、作品に登場する全てのものたちの光陰の模様という意味も込められている。